

一般国道161号（西大津バイパス）建設工事に伴う

## 大津市大伴遺跡発掘調査報告書

1986. 12

滋賀県教育委員会

財團法人 滋賀県文化財保護協会

一般国道161号（西大津バイパス）建設工事に伴う

## 大津市大伴遺跡発掘調査報告書

1986. 12

滋賀県教育委員会

財団 法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

埋蔵文化財といわれる遺跡あるいは遺構・遺物は、過去の人類の全ての物的痕跡であり、意識的あるいは無意識のうちに大地に残された歴史資料であります。

多くの場合、これらは土地に埋もれており、逆にそうした状況に置かれていたために、今日まで残されたものであると言えます。

こうした先人の残してくれた国民共有の財産である文化財は、現代を生きる我々が後世に引き継いでいかねばなりませんが、広く県民の方々の文化財に対する御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う発掘調査の成果をとりまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に御協力頂きました、地元ならびに関係機関の方々に厚く感謝の意を表します。

昭和61年12月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田志農夫

## 目 次

序

例 言

1. はじめに .....	1
2. 位置と環境 .....	1
3. 調査の経過 .....	1
4. 調査の結果 .....	4
イ、遺構 - A 地区	
ロ、遺構 - B 地区	
ハ、遺物	
5. まとめ .....	12
6. おわりに .....	13

## 例　　言

1. 本書は一般国道161号(西大津バイパス)建設工事に伴う大津市大伴遺跡の発掘調査報告書で、昭和60年度に発掘調査し、昭和61年度に整理したものである。
2. 本調査は建設省滋賀県工事事務所からの委託により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
4. 本事業の事務局は次のとおりである。

昭和60年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原 浩	文化財保護課長	服部 正
課長補佐	中正 輝彦	課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通	埋蔵文化財係長	林 博通
" 技師	用田 政晴	" 主任技師	用田 政晴
管理係主事	山本 徳樹	管理係主任主事	山本 徳樹

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄	理事長	南 光雄
事務局長	江波弥太郎	事務局長	中島 良一
埋蔵文化財課長	近藤 澄	埋蔵文化財課長	近藤 澄
調査二係長	田中 勝弘	調査二係長	田中 勝弘
総務課長	山下 弘	調査二係技師	細川 修平
" 主事	松本 祥弘	"	大崎 哲人
		総務課長	山下 弘
		" 主任主事	立入 裕子

5. 本書の執筆は、4のロの遺物の項については細川修平が担当し、その他の項及び本書の編集については田中勝弘が担当した。
6. 出土遺物や写真、図面については滋賀県教育委員会で保管している。

# 目 次

序

例言

1.はじめに .....	1
2.位置と環境 .....	1
3.調査の経過 .....	1
4.調査の結果 .....	4
イ、遺構－A地区	
ロ、遺構－B地区	
ハ、遺物	
5.まとめ .....	12
6.おわりに .....	13

## 挿 図 目 次

図 1. 遺跡位置図 .....	2
図 2. 周辺地形図及びトレンチ・遺構分布図 .....	3
図 3. A地区西崖断面土層図 .....	4
図 4. トレンチ 1・2・4・5 断面土層図 .....	5
図 5. 遺構及びトレンチ配置図 .....	6
図 6. 出土遺物実測図(1) .....	8
図 7. 出土遺物実測図(2) .....	10

## 図 版 目 次

図版一. (1) A地区発掘前(北より)	
(2) A地区発掘後(西より)	
図版二. (1) A地区近景(北より)	
(2) A地区近景(西より)	
図版三. (1) A地区トレンチ 2~5 断面(北より)	
(2) B地区トレンチ(南より)	
図版四. 出土遺物	
図版五. 出土遺物	

## 1. はじめに

大伴遺跡は、大津市南志賀地先に所在する。隣接して、南滋賀遺跡、南滋賀町庵寺、橿木原遺跡、福王子群集墳、大伴群集墳等が分布している。大伴遺跡に関しては、昭和55年度、56年度に、一般国道161号（西大津バイパス）の本線建設工事に先立ち発掘調査が実施され、縄文時代の遺物を含み、弥生時代中期から鎌倉時代の遺構群が検出された。昭和58年3月には、その成果が『大伴遺跡発掘調査報告』（滋賀県教育委員会、財滋賀県文化財保護協会）に上梓された。しかし新たに、既調査範囲のバイパス本線東側において、本線擁壁工事のために路線外の掘削が必要となつたこと、および、未買収地域の解決によって、調査が必要となつた。遺跡が本線東側へ広がるであろうことは、既調査により判明しているところであり、又、北側についてもその可能性が充分に考えられるところであった。従って、建設省の要請を受け、事前に発掘調査を実施することとなったのである。

現地発掘調査に当つては、細川修平（同志社大学研究生、現 財 滋賀県文化財保護協会 技師）、大崎哲人（京都教育大学学生、現 財 滋賀県文化財保護協会 技師）大島和彦、中川原恵美、藤田靖子、森正（以上京都教育大学学生）、赤井信司（甲南大学学生）、田中真紀子（大谷大学学生）、川崎保（同志社大学学生）、立川正明等諸氏の協力を得た。記して謝意を表します。

## 2. 位置と環境（図1.2）

大伴遺跡は、大津市南志賀に所在し、南志賀集落の西方に位置する。摩川の上流である大川が形成する扇状地の扇頂部に立地する。今回の調査位置は昭和55・56年度調査範囲に接して東側及び北西部に當る。位置と環境に関しては、既報告書に詳しいので本書では省略するが、既調査では、弥生時代中期に遡る旧河道や弥生時代の堅穴住居群、土壙群、6世紀後半の横穴式石室（福王子17号墳）、土壙墓とされる土壙群、弥生時代中期から江戸時代までの土壙群等が検出され、遺物では縄文時代まで遡る物が出土している。

## 3. 調査の経過

調査は、擁壁工事部分をA地区、未買収部分であった個所をB地区とした。A地区は既に表土（耕作土）の一部が除去されていたが、一部残土があり、また、床土をのこしていたため、重機によりそれらを除去した。その後に人力により遺構追索を行なつた。又、調査対象地域の西側は、バイパス本線工事により削平され、表面に堆積土層が露出していたため、この崖面を利用して土



図1 遺跡位置図(矢印) S =  $1/25,000$

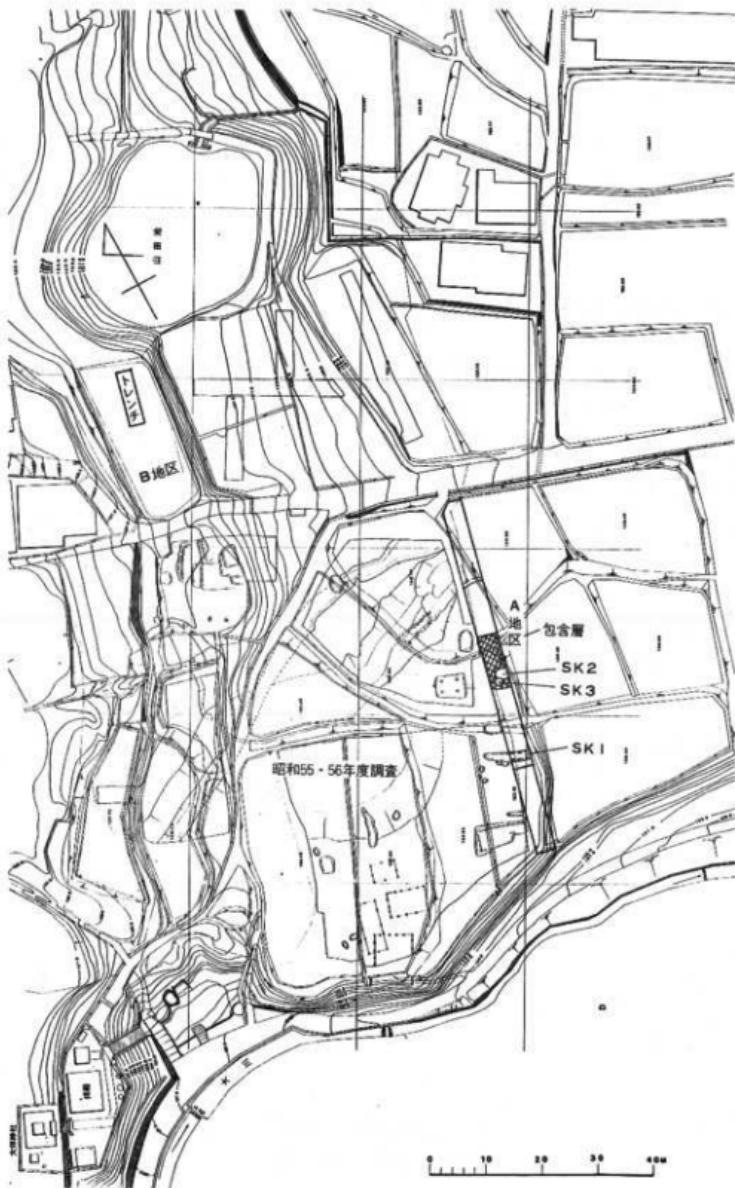


図2 周辺地形図及びトレーニング・造構分布図

層の観察を実施した。その結果、調査対象南よりは砂層の堆積が厚く、遺構や遺物は認められなかった。北側については、調査地域中程で遺物の包含層を確認するとともに、土壌等を検出した。B地区については、重機搬入通路確保のため、工事の進捗状況に対応させて、A地区の調査終了後一時中断し、搬入可能となってから再開した。調査は、当初トレンチ(23m×9.5m)調査とし、その結果に基づき発掘範囲を拡張する必要は生じなかった。B地区については埋め戻しを行なった。

#### 4. 調査の結果

A地区においては、弥生時代から平安時代にかけての遺物包含層、平安時代の土壌、弥生時代の土壌、近世の土壌等を検出した。B地区については、遺構や遺物包含層等は確認できなかった。

##### (イ) 遺構—A地区(図3～5)

遺物包含層(図3) 現水田の段落部分で、南北5m程の範囲で検出した。厚さ10～20cmで、耕作土及び床土の直下で確認している。包含層下には暗茶褐色土や茶褐色土の堆積が認められるが、遺物を含まず、安定しているところから地山と考えて良いものである。地山は包含層範囲付近から北へ向けて緩傾斜しており、現水田開発時に削平を免れた範囲に辛うじて包含層が残ったものと考えられる。包含層中からは弥生時代中期後半から平安時代後期までの土器類や石器類が出土している。包含層は極めて部分的であるが、包含層遺物の下限が平安時代後期であるなら、現在の段差の著しい水田の開発時期を知る手立てとなる包含層であるということができよう。

土壌(SK2)(図5) 幅2.5m、長さ5m程の長楕円形の土壌で、長さ3.5mの巨石が入り込んでいる。巨石の移動が困難であったため、最深所まで掘削できなかったが、1m近くに及ぶものと思われる。壙壁はほぼ垂直であり、人工的なものであるが、性格は不明である。出土遺物には土器、石器、土鍬等があるが、土鍬に疑問を残すものの他はすべて弥生時代に収まるものであり、細片をも含めて後世の遺物は含んでいない。

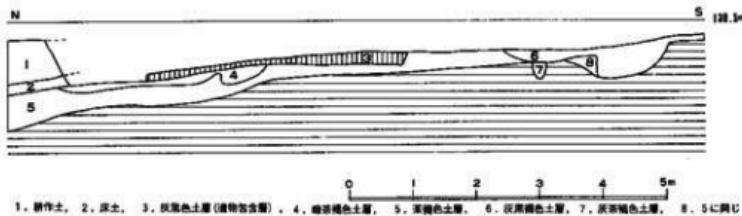


図3 A地区西崖断面土層図

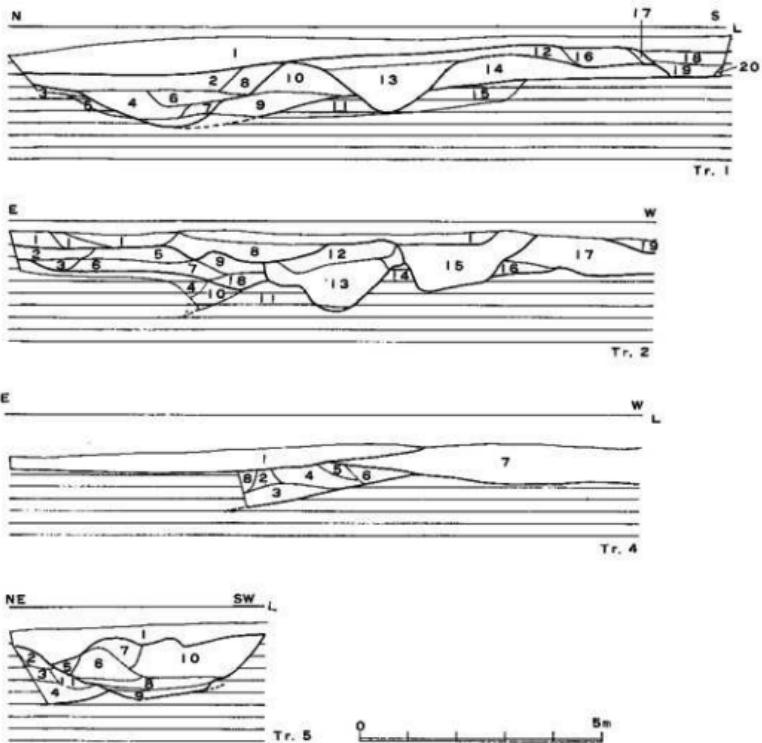


図4 トレンチ1・2・4・5断面土層図 (L=130.3m)

**土壤 (SK 1) (図5)** 長さ7m、最大幅2.5mの土壤である。黒色土が堆積し、この黒色土を切って幅1.5mの範囲で暗茶褐色土の浅い堆積が認められた。深さは、底に凹凸があるが、約30cm程で、弥生時代から平安時代までの遺物を含んでいた。

**土壤 (SK 3) (図5)** SK 1を切り込む2m×2.3mの円形の土壤で、弥生時代から近世までの遺物を含む。垂直に掘り込むもので、多数の割石が入り込んでいた。井戸あるいは野塹であろうか。

**No.1～No.5トレンチ (図4)** 深掘し、下層造構などの有無を確認した。各トレンチで古墳墳丘裾部の地山整形の痕跡かと思われるものや墳丘盛土の一郭かと思われる堆積層などが認められた

が明確さを欠く。

(ロ) 遺構—

B地区(図2)

B地区には23m × 9.5mのトレンチを設定した。表土下84cmまで旧耕土や盛り土が堆積しており、以下は地山となる。すでに削平を受けている様子であり、遺構や包含層などは検出できなかった。

(ハ) 遺物

(図6,7)

遺物はA地区からのみの出土で、表土除去時の採集品、遺物包含層及び土壌1~3からの出土遺物で、土器、石器、土鍤等がある。

土壤2(図6)

2は弥生土器の底部片で、底径6.5cmを計る。弱い上げ底の底部から鋭く屈曲した後に、

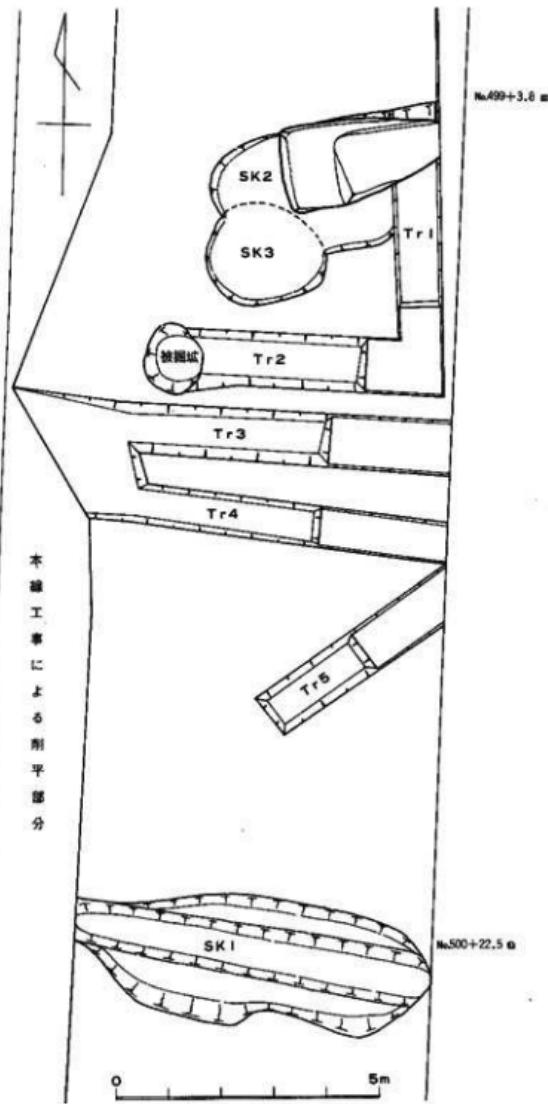


図5 遺構及びトレンチ配置図

外反気味に伸びる体部にいたる。外面は刷毛の後になでを加える。チャート、長石等の石粒を多く含む胎土で、淡茶褐色を呈し、堅緻に焼成している。底部が小形化しており、弥生時代後期のものであろう。

1も弥生時代土器の底部で、底径5.0cmを計る。平底の底部より、緩やかな曲線状に屈曲して直線的に伸びる体部にいたる。磨滅のため詳細は不明だが、外面は刷毛調整と思われる。長石や石英等の石粒を多く含む胎土で、淡茶褐色を呈し、やや軟質に焼成している。小形化した底部は弥生時代後期の所産と判断される。

5は小形で球体の土錠である。径2.5cm、長さ2.0cmを計る。棒状工具に粘土を巻き付けた後、指頭圧、なでによって調整している。石粒を多く含む胎土で、明茶褐色を呈し、軟質に焼成している。一般には、古墳時代以降に用いられる形状の土錠ではあるが、後述のように年代に関しては後考を待ちたい。

3は、磨製の石器片。厚さ0.2cm弱の小形の扁平な石器の断片である。断面にはやや鈍いが両側より刃部を磨ぎだしている。粘板岩系の石材で、丁寧な製作である。石鐵の可能性もある。全体像が不明であるため断言できないが、弥生時代中期の所産として大過なかろう。

4も磨製石器の破片。平坦な磨研面より鋭角的に屈曲した短い面を形成した後、再び平坦面に続く。安山岩系の石材で、丁寧に製作されている。利器の可能性が強く、弥生時代中期と考えられる。

土壤1(図6) 10の壺形土器は、口径20.0cmを計る広口のものの口縁部は、端部で下方に肥厚させ外方に面を形成する。口縁内面には櫛列点文を羽状に施文している。口縁端面にも文様が予想されるが不明である。腐れ礫を含む胎土で、淡褐色を呈して軟質に焼成している。端部の処理や文様の在り方から、弥生時代中期後半のものであろう。

土壤3(図6) 6は土師器の皿で、口径13.4cm、器高3.0cmを計る。底部よりなだらかに体部へ移行し、二段なで技法部を経て、丸く納める口縁端部へ移行する。長石、石英等の砂粒を含むやや粗雑な胎土で、淡灰褐色でやや軟質に焼成する。平安京編年では褐色系大皿A1もしくはA2タイプに該当するものと考えられる。

7は黒色土器の碗。口径15.6cm、器高約5.0cmを計る。口縁端部内面に沈線を一条巡らせるタイプで、高台の形状は不明である。外面上半と内面に篦磨きを施すが、暗文技法は導入されていない。炭素吸着は、内面と外面部に限られている。若干量の砂粒を含む砂質の胎土で、淡茶褐色でやや軟質である。新旭町堀川遺跡、守山市服部遺跡溝1上層等に類例が在り、10世紀後半から11世紀前半の所産と考えられる。

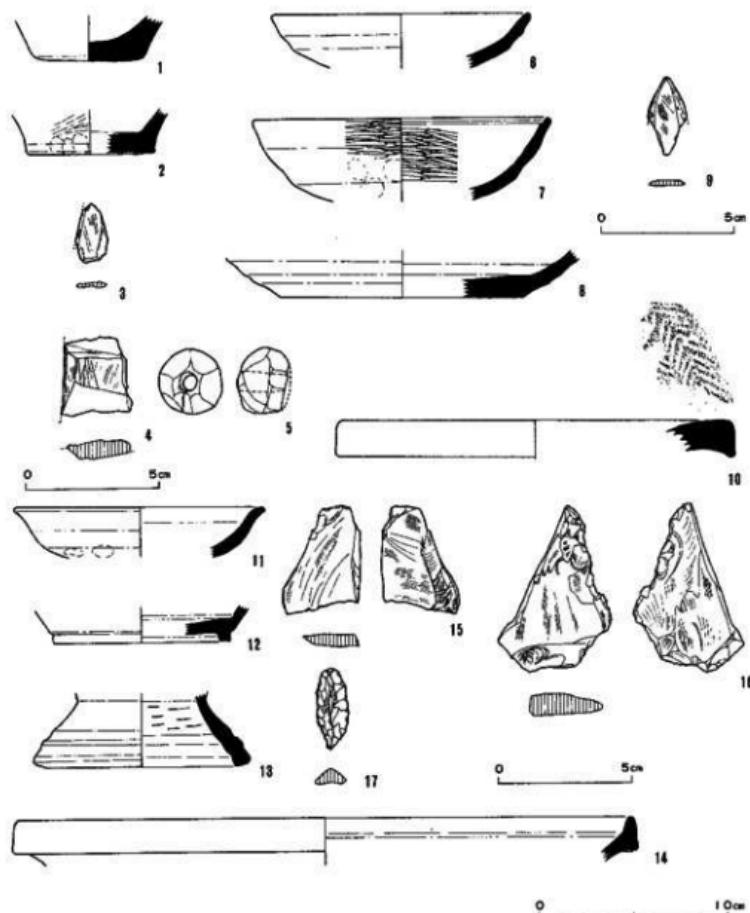


図6 出土遺物実測図(1) (石製品・土器のみ別途スケール)  
 (1~5; 土器2, 6~9, 16; 土器3, 10; 土器1, 11~15, 17; 包含層)

8は陶器で、瀬戸焼きであろう。底径13.0cmを計る。笠削り技法により、底部と体部との境界を明瞭に形成する。底部内面に施釉が認められ、皿等の器形が予想される。石粒のほとんど無い精良な胎土で、灰色を呈し、硬質な焼き上がりである。中近世のものであろう。

9は磨製の石器。全長2.9cm、最大幅1.5cm、最大厚0.2cmを計る。凸基有茎式に分類され、基部

から茎にかけては打ち欠いた後に磨いている。刃部は両面より形成されていて鋭い。安山岩系の石材で、精巧な作りを示す。高峯造跡や湖西線関連遺跡等近江南部での類例が多く、弥生時代中期の所産と判断される。

16は打製石器。長さ6.4cm、幅4.0cm、厚さ0.8cmを計る。表面は基本的に自然面で、先端部から右縁辺にかけて調整削離を加えて刃部を形成する。裏面は基本的に二つの削離面で形成され、一部に調整削離を有す。石核を利用して製作され、ナイフ等に利用されたものであろう。安山岩系の石材で丁寧な製作であるが、年代は明らかにしがたい。

**包含層(図6)** 12は須恵器の杯。径9.3cmを計る高台付きのもの。高台は回線をはさみ尚側接地の短いもので、底部と体部との境界付近に付く。体部は直線的に伸びるものと予想される。大粒の石粒を多めに含む胎土で、青灰色を呈し、硬質に焼成している。奈良時代後半のものであろう。14は須恵器の鉢。口径33.2cmを計る。直線的に伸びてきた口縁部を上方へつまみ出す同時に、下方へも若干肥厚させる。長石や石英を含むざらざらした胎土で、淡青灰色を呈した硬質のものである。東播地方の產と考えられ、平安京の消費地での編年では13世紀後半に位置づけられる。

11は土師器の皿。口径13.0cm器高、3.3cmを計る。底部より体部へなだらかに移行し、一段なで技法によって外反する口縁部へ至る。微細な石粒を若干量含む安定した胎土で、灰白色を呈し、硬質に焼成している。平安京編年で11世紀後半から12世紀前半に該当しよう。

13は弥生時代の甕形土器の脚台。底径10.0cmを計る。内側に接地点を有する底部は面を形成し、内上方に伸びる。回線文を二条に巡らす。内面上反に篦削り技法を用いる他はなでのみである。腐れ穂を含む胎土で、淡赤褐色の硬質のものである。回線文技法等から弥生時代中期後半の年代が考えられる。

17は、長さ3.1cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmを計る石器。断面三角形を呈するが、先端部付近は両面より調整削離を加え、鋭い刃部を形成している。安山岩系の石材で、やや粗な製作である。弥生時代のものであろう。

15は石器の剥片。長さ4.2cm、幅3.0cm、厚さ0.5cmを計る。表面は一面削離、裏面は二面削離で構成される。若干の調整削離も見られるが、刃部等の形成は無い。安山岩系の石材で、年代等は明らかでない。

**表土層及び表探(図7)** 9～14は弥生土器である。10は口径17.4cmを計る甕形土器。体部より鋭く屈曲して、直線的に外方に伸びる口縁部に至る。口縁端部は若干肥厚気味で外方に面を形成する。体部外面と内面は荒い刷毛調整を施す。口縁端面には刻み目文を施す。腐れ穂を含む南

近江特有の胎土で、茶褐色を呈し、硬質に焼成している。中期の土器であろう。

9は所謂近江系壺形土器の口縁部である。口径 13.2cm を計る。口縁端部は外方へ大きくつまみ出しており、外反するカーブを描く。口縁部外面に櫛描列点文、頸部に櫛描直線文を描く。南近江特有の胎土で、淡茶褐色を呈し、やや軟質に焼成している。後期後半ないし庄内期ころのものであろう。

11は壺形土器。口径 20.4cm を計る。頸部より直線的に広がった後、大きく外反する口縁部に至

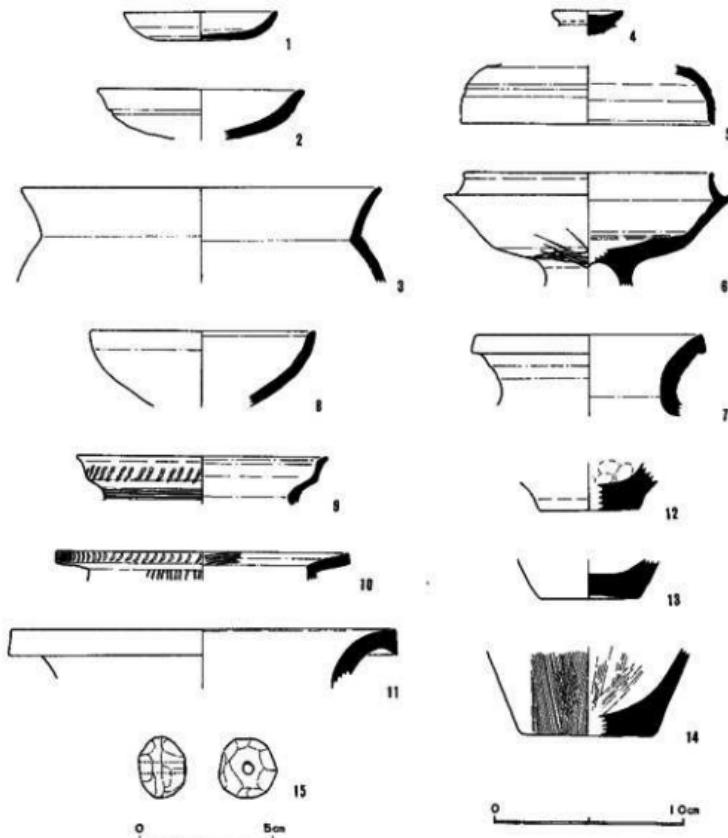


図 7 出土遺物実測図2(土錘のみ別途スケール)(表採遺物)

る。口縁端部は上下に肥厚させ、外側に面を形成する。内外面ともになで技法のみである。南近江特有の胎土で、明黄褐色を呈し、硬質に焼成している。中期のものであろう。

13は底部片で、底径5.2cmを計る。弱い上げ底の底部より鋭く屈曲して、外反気味に伸びる体部に至る。全面に笠磨きを施す。金色発色の黒雲母を含む胎土で、明褐色を呈し、やや軟質に焼成している。後期のものであろう。

14も底部片で、底径7.0cmを計る。平底の安定した底部から鋭く屈曲し、直線的に伸びる体部に移行する。外面は丁寧な刷毛を施しているが、内面は磨滅のため不明である。南近江特有の胎土で、橙褐色を呈し、やや軟質に焼成している。底部の小型化はさほど進行しておらず、中期末から後期前半のものであろう。

12も底部で、径5.2cmを計る。平底の底部より鋭く屈曲し、外反する体部に至る。なで技法によって整形している。南近江特有の胎土で、黄褐色を呈し、硬質に焼成している。後期後半のものであろう。

4～7は須恵器類である。4は杯蓋のつまみ。最大幅3.7cmを計る。著しく偏平化したもので、長石等の若干の石粒を含む胎土で、淡青灰色を呈し、やや軟質に焼成している。奈良時代後半から平安時代のものと思われる。

5も杯蓋。口径13.4cmを計る。比較的偏平なものとおもわれる天井部から、弱い稜線と凹線によって画され、ほぼ垂直に伸びる口縁部に続く。口縁端部は内傾する面を形成する。天井部の3分の2程度に回転笠削りが施されているものと思われる。石粒を多く含む胎土で、淡青灰色を呈し、硬質に焼成している。阪南窯跡編年でTK10に該当しよう。

6は高杯。口径13.1cmを計る。受け部は短く、外方へつまみ出す感がある。立上り部は、初め内傾するが徐々に直立し、端部は若干肥厚させる。脚部は細く、長脚になるものと思われる。脚と杯との境界付近には接合に伴う笠刻文がある。石粒のやや多い胎土で、暗紫灰色を呈し硬質に焼成している。阪南窯の編年でTK10に該当しよう。

7は壺。口径12.0cmを計る。体部より屈曲した後に、外反しつつ伸びる口縁部が続く。口縁端部は下方へ若干肥厚し、外側に面を形成している。内外面ともに回転横なで技法で、外面は若干回凸が存在する。若干の石粒を含む胎土で、淡青灰色を呈し、硬質に焼成している。古墳時代後期のものとみて良かろう。

1、2、8は土師器である。8は壺で、径11.8cm、器高4.5cmの小型のもの。底部より立上りを強めつつ口縁部に至る。口縁端部は弱いものではあるが、内傾する面を形成する。内外面とも上半部に横なで技法を施す。雲母、長石等を含む胎土で、明橙褐色を呈し、やや軟質のものである。

平安京編年で、13世紀後半～14世紀後半に該当するものと思われる。

1は皿。口径8.0cm、器高1.5cmを計る。ほぼ平底の底部から曲線状に立上り、ややつまみ上げ気味の口縁端部に至る。黒色の微粒子を含む胎土で、明褐色を呈し、硬質に焼成している。灯明痕を有する。平安京編年で13世紀後半に位置付けられる。

2も皿で、口径10.8cm、器高2.8cmを計る。底部よりなだらかに移行し、一段なで技法による外反する口縁に至る。一段なで部直下には沈線状に一条巡るが、なでに伴うものと思われる。雲母等を含む胎土で、橙褐色を呈し、やや軟質に焼成している。平安京編年で11世紀から12世紀に該当する。

3は黒色土器。甕で、口径18.8cmを計る。体部より屈曲して、外反する口縁部が付く。体部内面に刷毛技法が用いられる他は、荒い箆磨きを加える。内外面ともに炭素吸着。雲母、角閃石を含む胎土で、暗茶褐色（断面）を呈し、硬質に焼成している。生駒山山麓地域の胎土と考えられ、10世紀代のものと思われる。

15は土鉢。径21cm、厚さ1.6cm、孔径0.5cmを計る小型球形の土鉢である。棒状工具に粘土を巻き付けた後に指頭圧によって整形している。石英、長石等の砂粒を多く含む胎土で、淡茶褐色を呈し、やや軟質に焼成している。古墳時代以降のものと思われるが、前述のように年代にはなお問題が残る。

## 5.まとめ

今回の調査では、上記のようにA地区より、中近世のもの、平安時代後期、古墳時代後期、弥生時代中期末から後期のものが出土した。この中で、土壤2のみが弥生時代の遺物のみを出土するもので、土壤1は弥生時代から平安時代、土壤3は中近世のものまで含まれている。包含層も弥生時代から平安時代のものまで含まれていた。既調査でも弥生時代の住居群、古墳時代後期の横穴式石室、中近世までの土壤群が検出されており、従って、新たな知見はないが、遺跡が東への広がりを示すことが今回の調査で明確になった。

遺物に関しては、弥生土器の多くが、大津市域の調査で確認した範囲内での判断で、南近江特有の胎土を持つものであり、凸基式の磨製石器も近江南部に多いものである。須恵器の中には東播地方のものも見受けられ、また、黒色土器にも生駒山麓地域の胎土を持つものもあった。土鉢に関しては、小型球形のものが土壤2より出土しており、従来の年代観に問題を呈示してくれた。

## 6. おわりに

今回の調査は、大伴遺跡及び大伴群集墳の一部を発掘したのであるが、B地区では遺構等を確認できず、既調査を含めて、当該遺跡の北限を確認したことになった。A地区に関しては、土壌や包含層のみを確認したのにとどまったが、当該遺跡が東へ広がるものであることが明確になった。東側は南志賀の集落が接近しており、狭い範囲を残すのみであるが、当該遺跡の東限が確定されていないため、今後の開発に際してはその分布状況の把握に充分注意する必要があろう。



1. A 地区発掘前（北より）



2. A 地区発掘後（西より）



1. A地区近景（北より）



2. A地区近景（西より）



1. A 地区トレンチ 2~5 断面（北より）



2. B 地区トレンチ（南より）

圖版 四 遺物



出土遺物



出土遺物

昭和61年12月

一般国道161号(西大津バイパス)建設工事に伴う

**大津市大伴遺跡発掘調査報告書**

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財  
保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121

内線 2536

財 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷所 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
電話 0775-23-2580